

日本語の味覚形容詞語彙の類型的構造および方言分布成立

——「五味」とスイ・スッパイ・スッカイの語源(中国語「酢」)の再検討——

安部清哉

論文要旨

現代語では「五味」として扱われることがある「味覚形容詞語彙」及びその主要方言語形(カラシ・アマシ・ニガシ・シオカラシ・ショッパイ・スシ・スッパシ・スカシなど)の歴史と意味を検討し、古代における基本四語による語彙構造を明らかにして、それと色彩形容詞語彙(アカシ・アオシ・シロシ・クロシ)・温度形容詞語彙(アツシ・サムシ・ヌルシ・スズシ)各々の四語体系との共通点について考察する。味覚語彙としては、特に諸説ある酸味語彙の語源を再検討し、古代におけるアマシ・カラシ・ニガシ・*スハシ(異音スカシ)による特徴的四語体系を指摘する。特にスシの語原は、「酢+し」説を否定して*sukwa·siとし、中国語「酢」ほかアジア・太平洋の言語をその遡源と見る。さらに、上記の色彩・温度・味覚の3つの基礎形容詞語彙各四語の構造に、①語幹2音節、②第1音節母音と意味的強弱の関連性、③意味的形態的「語彙の階層性」、④優性語形がより基礎的古語、という類型を指摘し、それらを日本語基礎語彙の基本的構造の1パターンと位置付ける。さらに、⑤スカシと中国語「酢」[*dzʰäg]・オーストロネシア語[*sem]との同源[*sək]の可能性を指摘し、アジア・太平洋の「酸っぱい」の言語地図を提示する。

キーワード【味覚形容詞の語源、形容詞語彙の基本形、スッパイ、中国語「酢」、方言分布成立】

はじめに——形容詞による味覚の表現には、「あまからあじ」と甘いと辛いと並んだり、比喩表現として「酸^えいも辛いも噛み分けて」と酸いと辛いが同じマイナスイメージで扱われたり、いろいろな表現がある。方言分布では、塩味において、西のカライと東のショッパイ、酸味では、西のスイ(イ)と東のスッパイ・スッカイという東西対立があり、東西の語形のどちらが日本語として古いかについてはまだ定説がない。また、ウマイの語源はアマイであって、アマイものは美味しいものであったからその母音^えが変化して生れたものだとされている。これらの味覚形容詞語彙は、五感の表現でもあるので、極めて基礎的形容詞であるが、基礎的語彙には、色彩形容詞(赤青白黒)や指示代名詞において既に知られているように、形態と意味の上で特徴的体系が見出されている。味覚形容詞においても、その意味的形態的特徴と、未解決である特異な方言分布の東西対立の成立過程について、改めて検討してみる余地がある。

一 五感形容詞語彙の1つとしての味覚形容詞語彙

本稿では、味覚形容詞語彙の史の変遷でも、特に、スッパイなどの酸味形容詞の語源、および、ショッパイ・カライなどの鹹味(=塩味)と辛味との意味分化の問題を中心に取り上げ、それらを踏まえて味覚語彙の古代語での構造を明らかにしてみたい。そして、特にスッカイ・スイの語源が実はアジア・太平洋の言語と同源であること、また古代味覚語彙の特徴と、色彩形容詞語彙、温度感覚形容詞語彙の構造とを比較し、五感という基本的表現における日本語の基礎語彙の構造の特徴について考察してみたい。

現代日本語(標準語)の味覚を表す語彙には、アマイ、カライ、スッパイ、ニガイと、シオカライ

の五つがある。これらを方言分布で見ると（後で詳述）、ショッパイという言い方は、最近では西日本の若い人も使うが、近代語としては東日本の方言形で、西日本方言ではカライが使われている。シオカライはこれらの標準語にあたる。スッパイも西日本の伝統的方言ではスイ・スイイである。他に、シブイは舌での感覚を表してはいるが、エグイと同様に、「食べ物の味覚としての表現」という点では使われないと言えよう。これら五つの味覚表現も、時代を遡ると微妙な変化があり、そこに、味覚語彙と日本人の味覚表現の特徴が見てとれる。

さて、この五味のうち、鹹味（塩味）のショッパイと酸味のスイ・スッパイ・スッカイの語源には、いくつかの説があり、まだ必ずしも十分明らかにされていないところがある。小論では、まずそれらの語源・語構成を、方言分布の解釈にも言及しながら検討していくことにしたい。またそれらの検討によって、味覚語彙の古い構造を明らかにして見ると、そこには、色彩形容詞語彙、温度形容詞語彙との共通する構造を見出すことができる。それら、五感感覚の一部をなす基礎語彙に、どのような日本語語彙の基本構造が現れているかも、併せて検討していくことにする。

ところで、この味覚の五語と関わる漢語に「五味（ごみ）」という表現がある。これは、「五臓、五音（音楽、聴覚）、五香（体臭、嗅覚）、五悪（気候、温度感覚）、五液（体液）、五竅（五感の機能）、五主（体の部分）」等と同様に、中国の五行思想と関わりもある語である。五味は、五つの基本味覚を指すもので、「酸味・苦味・甘味・辛味・鹹味（カンミ、塩辛さ）」を指している。この中国渡来の〈「五味」という概念〉は、少なくとも平安時代初期には日本に受容されていると推定されているが（長尾勇 1982）、現代日本語の上の五つの形容詞はこの五味と結果として一致している。この中国での五味にもやはりシブイ・エグイに当る語は入っていない。

五つの形容詞は、漢語「五味」とも一致し、われわれ現代人の感覚からもこの五つの味覚は基本的なものとして日常的で違和感のないものであるから、この五分類が味覚表現として網羅的で普遍的なものと思われがちである。しかし、歴史的には必ずしもそうでもないらしい。五味ではなく「四味」であったことが語彙史をたどることで明らかになる。まず、日本語史研究におけるこの味覚語彙の研究を少し確認してからそれらの検討に入っていくことにする。（なお、味覚語彙の方言分布については、国立国語研究所編『日本言語地図』（LAJ）に「あまい」（LAJ37 図、本論図 1、以下同様に）、「<塩味が>うすい」（38 図、本論図 2）、「しおからい<鹹い>」（39 図、本論図 3）、「からい」（40 図、ほぼ全域カライなので掲載は略す）、「すっぱい」（41 図、本論図 4）、「おいしい」（291 図、掲載略）がある。「にがい」の全国的方言地図は今のところ見られない。LAJ の地図を簡略にしたものが、佐藤亮一監修 2002.7 にあるので、それを図 1～図 4 として提示する。略図で省略されている分布や語形などの情報については本文にて解説する。）

二 従来の国語史・方言学における研究史——文献資料における語彙史と方言地図解釈——（長尾勇論文を中心に）

日本語学・方言学における先行研究としては、文献資料と方言分布を取上げた長尾勇 1982・1983・1986 があり、また、文献資料にも言及するが主に方言分布の解釈を中心としたものとして、『日本語地図』の「解説」のほか、野元菊雄 1979（LAJ「解説」担当者も野元氏か）、真田信治 1983、柴田武 1990、佐藤亮一監修 2002（「酸っぱい」担当は真田信治氏か）、がある。この二では、文化人類学的視点の石毛直道 1983 と、長尾勇氏の三つの論文について簡略に言及し、その他は四章以下の本文

図1 あまい (甘)

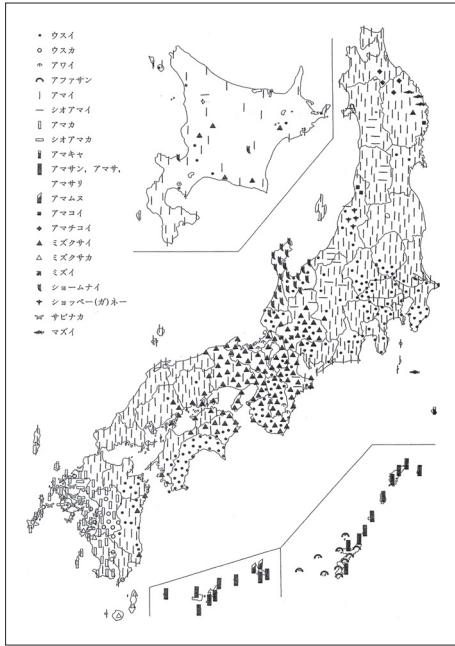


図2 (塩味が) うすい (薄)

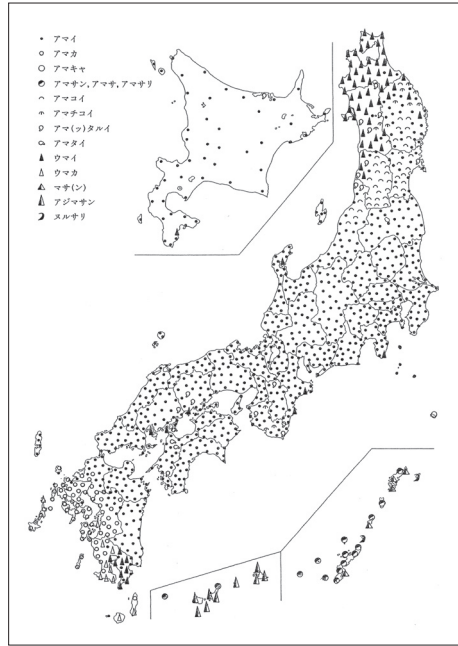


図3 しおからい (塩辛)

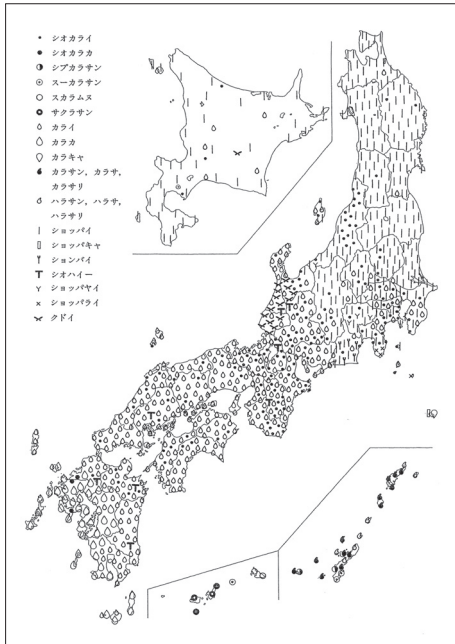
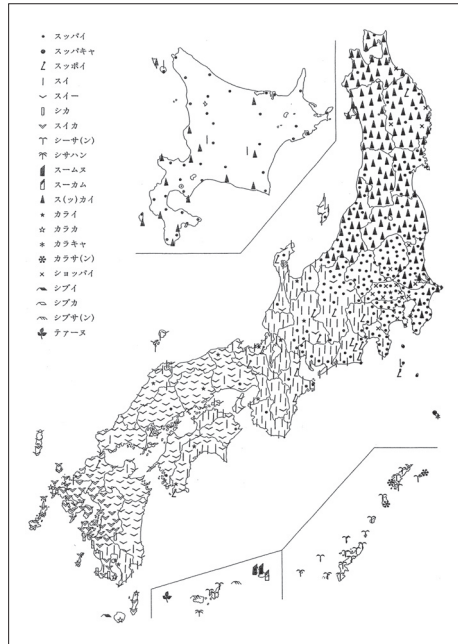


図4 すっぱい (酸)



で検討することにする。

石毛直道 1983 では、主に文化人類学の視点から、他言語の事例も合わせて味覚表現が取り上げられている。そこでは、生理学・心理学における味の体系として、ヘーニングの提出した四原味（しおからい、あまい、すっぱい、にがい）による「味の四面体」が紹介され、ミクロネシアの AN 語のボナベ語、モルッカ諸島のガラレ語、トルコ語、アメリカ英語の味覚語彙と表現を比較している。四つの基本的な味としてこれら四味を挙げている点は、本論で結論とする基本四味と共通する点で興味深い。日本語の史的変遷とは直接には関わらないので略す。

長尾勇の 1982、1983、1986 は、日本語での味覚語彙の史的変遷と方言分布の解釈、及び、味覚語彙でも「しおからい」の語源である「しははゆし」を取上げた研究である。長尾 1982 では、漢籍、日本の国内資料から「五味」（甘・辛・酸・苦・鹹）の分類が平安初期には既に成立したと推定し、それぞれの意味に当る語形の史的変遷を詳しくたどり、時代毎の味覚語彙語形年表を初めて提示された。最後に方言分布（『日本語言語地図』）の解釈も加え、文献と若干比較しているが、方言地図の解釈はむしろ長尾 1983 で補われている。『日本語言語地図』における当該語彙の調査上の問題点を指摘し、かつ、文献資料においては、複数語形のあるカラシ・シハハユシ・シホカラシ、アマイ・ウマイの関係の問題など、後に続く研究への課題を指摘している。ただ、中国文献などから日本でも平安初期には「五味」体系だったと推定しているが、平安以前やシハハユシとカラシの関係などは問題とされていない。

長尾 1983 は、長尾 1982 を下敷きにしつつ、特に言語地図の解釈を、LAJ での「解説」を踏まえながら補強し、一般向けに書き足したものである。文献資料は長尾 1982 を踏襲したものであるが、「酢」の用例に「苦酒」の表記と「カラサケ」の訓を挙げ、酸味と辛味ないし鹹味とがある場合（酢・カラサケ）に微妙に接近している問題を確認している。言語地図の解釈は、紙幅の関係もあろうが今の言語地理学的水準からはやや物足りないところもある。

長尾 1986 の「しははゆし考」ではショッパイの語源として既に指摘されていたこの語を文献資料で確認し、LAL での 8 地点のほか熊本での調査によってその変化形であるシオハユイ・シオハイカを報告している。

長尾氏の一連の論文では、各語形の語源的問題はショッパイ以外は特に検討されておらず、また、「五味」の事例が定着する前の平安以前の問題は考察されていない。そのため、言語地図の解釈も、古い時代や東西での歴史的相違の成立過程、「五味」でなかった段階を視野に入れた文献や方言の考察はなく、それらが課題として残っていた。

他の先行研究における語源的解釈および古い段階での方言解釈については、次章以下、本文の中でそれぞれ個々に取上げて検討していくこととしたい。

三 鹹味と辛味の分化——「四味」から「五味」へ

まず、カライとシオカライ（ショッパイ）の問題を取り上げる。

カライとシオカライ、つまり、辛味と鹹味とは、古くは区別されず、一つの範疇（仮に「辛鹹味」と表記していく）であつたらしい。そのことは、方言研究では、分布の解釈からほぼ定説化していると思われる。本稿では、方言分布以外に文献例も取り上げ、辛味と鹹味がおよそ中古末以降に意味分化し、少なくとも中世には語彙体系として「四味」から「五味」体系になったことを新たに指摘してみる。

初めに語構成上の問題から見ていく。

まず語構成を見ると、五つの形容詞のうち、標準語シオカライだけが複合語であるが、他は単純語という相違があることに気付く。一般に、基礎的な語は単純語で後から生まれた語は複合語になる。シオカライの古形シホカラシは、文献では、『今昔物語集』から現れる語で、他の語（後述）よりも新しいことがわかる。シホカラシは、シホ（塩）＋カラシとして生まれた語形で、「『塩』味によるカラサ」を表そうとした語形であることが語構成からも明らかである。つまり、もとは「カラシ」の一群として把握されたもので、鹹味と辛味とは区別されていなかったであろうことが、この語構成からもわかることになる。

一方、鹹味には、伝統的方言としては東日本方言であるショッパイがある（現在は全国的共通語という段階にある）。語源は、次に見るように、シホハユシ、さらにシハハユシに遡るもので、この「シハ＋ハユシ」もやはり複合語であり、他の四味が単純語であるのとは明らかに異なっているのがわかる。

このシハハユシの語構成と語源については諸説あるが、シハは、シハブク・シハガル・シハブルのシハと同源で「舌・唇」の意味であり、ハユシの語源はカユシと同じで（安部 2000）、ハユシは「むず痒い感じがする」（日本国語大辞典）というある種の皮膚感覚的違和感と解釈される語である。それは、クスグツタイことをいうコソバユシや、目バユシ（眩い）、オモ（面）ハユイ、カオ（顔）ハユイ（→カウユイ→カワイイ可愛）のハユシと同源であることから支持される。つまり、「舌・唇が（鹹味で）むずむずと痒い感じ」を表したものである。シハハユシには、古く「シホ（塩）ハユシ」を語源と見る説もあったが（『小学館古語大辞典』『シハハユシ』山口佳紀氏執筆）、シホハユシの用例が、ずっと後の室町末以降であるという、『日本国語大辞典』でも指摘されている難もあるが、むしろ、次の点で古形としての可能性は低い。

～ハユシは、上掲のように、いずれも目・顔・面（＝顔）との複合で、全て感じている身体部位を前項にしているから、シハは「塩シホ」ではなく「舌・唇」と見るのが適切である（コソバユシもコソコソされて感じている場所を前項で指すとも言えよう）。むしろ、シホハユシは、シハハユシのシハが後に不明となり塩（シホ）と語源俗解（民間語源解釈）されたか、あるいは、シホカラシとシハハユシが混交（contamination）（日本国語大辞典）を起こしたために、室町末に生まれたものと見なせよう。

そのシハハユシの古例は、『大般警諭經 治安四年点』1024年（日本国語大辞典）に見られ、それは中古末（『今昔』）のシホカラシより確かに先に現れる。前者シハハユシは中世末にシホハユシ→シオハユシを経て口語化してショッパイにつながる。後者シホカラシは古辞書にも掲載され、シオカラシを経て標準語になる文語的語形と見られる。後代に口語語形になる方が先行し、しかも、意味がやや曖昧なシハハユシという表現をまず取り、次に辞書や文語で「塩・辛い」という意味的にも語形的にも分析的で明確な表現を生んでいる。口語・文語での年代差を経つつ、「辛鹹味」から鹹味が分化していったことがわかる。

このように、

「辛鹹味（カラシ）から意味分化した鹹味表現の文語のシホカラシ・口語のシハハユシは、いずれも語形の上で他の単純語四味と異なる形をとりつつ、ほぼ同時期中古後半には複合語として相前後して派生し誕生することで、鹹味の意味分化を成し遂げた」ということが新たに確認できる。

方言分布を確認しておけば、既に『日本言語地図』で知られるように、西日本では「このお味噌汁 カライわね。」というように鹹味もカライで表現される。これも、方言研究では鹹味と辛味が古くは「未分化」であった名残とされている。東日本は鹹味はショッパイ、辛味はカライで、この二語体系は、二味を区別するようになった後代のものである。(同様の事例には、「明るい」ことをアカイともいう言い方がある。) 語形と方言分布の特徴から、鹹味・辛味の区別がなかったことを見た。「塩味がピリッと効いている」と「舌がひりひりと辛い」という表現に、語源的に共通するヒリ・ピリが使われていることにも、その近さが現れている。

ところで、現代人の我々から見ると、塩味と辛さとは明確に異なるように思われるが、辛味をもつ古代の食物を考えると芥子菜・山椒くらいであり多くはない。また、胡椒や唐辛子などが香辛料として一般化するのには中世以降の後代であり、むしろ、海水によるにがりの効いた塩や岩塩などのピリッとした鹹味の方が普通だったことが影響していると考えられる。そのような、ぴりりとする鹹味が、「カラシ」の中心的意味であって、鹹味専用の表現が、シハハユシ・シホカラシとして分化独立して後に、カラシは辛味の意味に特化されていったものと考えられる。カラシの意味史としては、「鹹味重点→辛味重点」の変化も考慮される。

補足すれば、「五味」という語は、漢語が浸透していく鎌倉時代の辞書『伊呂波字類抄』(日本国語大辞典第2版)から見られる(長尾1982ほか)。これは、まず平安末には、カラシと関連付けられたシホカラシが現れ、鹹味はそれ以降徐々に、カラシとは別の五つ目の味覚として自覚され、鎌倉期には漢語の影響もあって「五味」として把握されていった、と解釈される。このように、「日本語はもとは酸味・苦味・甘味・「辛鹹味」の「四味」で、概略、中古末から鎌倉以降「五味」体系へと移行した」と位置付けられる。

四 酸味の形容詞——スシ・スツパシ・スカシの語源と語彙史——

四一(1) 主要語源説一覧

酸味を表す形容詞には、共通語スツパイ(スツパシ)のほか、西日本方言スイとその長音化語形スイイ、東北北陸方言ス(ツ)カイがある。酸味形容詞については、特にこれらの方言分布も視野に入れた解釈が必要になる。名詞ス(酢)を元にしてスシが生まれたとするのが通説であり、また、他の語形も同じくそれとの複合語ないし、変化形と解釈されている。しかし、その解釈では、酸味表現より前に酸味を加えるための液体「酢」の存在を前提にしなければならないという点で、味覚と事物の前後関係に疑問がある。これらの語源説と語構成とを、再検討するところから始める必要がある。

さて、酸味形容詞のこれまでの語源説の主用なものを、本稿で新たに検討に加えたものも含めて以下に挙げておく。

○スイ(スシ)——名詞ス(酢)に、形容詞を作る接尾辞シが接続したもの。(従来の多くの語源説はこの解釈を取る。いま『日本国語大辞典第二版』とその語源説欄を代表として挙げておく)

○スツパイ(スツパシ)——

①スツカシーショッパシ混交説——スシとスツカシの方言的緩衝地域(関東)で不安定になつた語形が、ショッパイの影響もあって、～パイという形態となった——野元1979説、真田1983でも踏襲。

②ス(酢)・ハユシ(映)の複合語説——柴田武1990、『日本国語大辞典第二版』補注

- ③スハ（舌の古語・方言形）・ハユシ（映・痒）——小林隆氏案 2006.12、シヨッパイがシハ（舌）・ハユシ（映・痒）を語源とするのと同様に、スハ（舌）を元にしてハユシが複合して生まれた可能性（小林隆氏ご提示の一解釈——小林氏科研費研究会（2006.12.23）での討論から）
- スカイ（スカシ）（スッカイは、その促音化語形とされている）——
- ①スシからの派生——（ただし、いずれの説でも派生過程の言語的説明はない）真田 1983、佐藤 亮一監修 2002（担当未詳）
- ②ス（酢）・カユシ（痒）——柴田 1990
- ③ス・カラシ——本稿で検討した可能性の一つ
- ④スカ・シ（カリ活用スカリのスカを元にして再度形容詞化された）——本稿で検討した可能性の一つ
- ⑤スハ・カユシ（痒）——本稿で検討した可能性の一つ
- ⑥スカシ祖語形説——本稿で提示する解釈
- 以下、これらについて、順次取り上げてみたい。

四一（2） スシ—液体「酢」が先か、味覚が先か——

スシの語源としては、唯一検討すべきものとして、次に代表されるように、古くから名詞「酢」を語源とする解釈がある。

- 「『酢』に、形容詞を造る接尾辞『し』が接続してできた語。『新撰字鏡』の「醋 酢也酸也 加良之（カラシ）又 須之（スシ）」から、酸味は、古くは鹹味や辛味と分化されずに『からし』で形容されていたと考えられる。』『日本語源大辞典』（スッパイ・スッカイは項目なし）、『日本国語大辞典第二版』も同様の解釈。

この名詞「酢」説の問題点は、まず、①酸味の味覚よりも先に、調味的液体「酢」が存在していたことになる点である。②また、古くから身近にあったであろう味覚であるにも関わらず、他の味覚形容詞と異なって単純語形としてではなく名詞起源の複合語になる点である。

最初の問題点から言えば、酸味のあるものは、例えば、果実や、食べ物の自然発酵などによる酸化食物は、古くから身近に存在していたであろう。酒の過酸化などによって「酢」という液体が特に認識されるより前に、まず酸味が自覚されたであろうことは、容易に想像できる。液体である「酢」がまず先に作られていなければ、酸味そのものは自覚し得なかった、とは考えにくい。つまり、スッパイという味覚は、「酢」が使用されるまで気づけなかった味覚であるというのはいかにも不自然と思われる。（むしろ、「スッパイ」液体であったから、何らかのその表現から「ス」と命名されたのではないか。語源と発生過程が逆転している場合を一度は検討しておくべきであろうことがわかる。）¹⁾

次に他の味覚形容詞との比較であるが、アマシ（奈良時代）・カラシ（奈良時代）・ニガシ（平安初期訓点資料）は、ニガシが平安初期の訓点資料に既にあることから見て、すべてほぼ上代からの単純語形と見なせよう。スシの確実な例は中古であるが、上代にある「鮓・鮓」の語源が形容詞スシに求められているので、形容詞スシも上代には同様に存在したと考えられるものの、「酢」先行語源説では、基本的味覚であるにも関わらず、スシのみは名詞派生語として作られたことになる（もちろん名詞派生の形容詞は少なくないが）。

一方、酸味は、科学的研究においては、人間の舌での味覚として、カラシ以外の他の三語同様に「基本味」と位置づけられている味覚である²⁾。そのような科学的味覚機能上の基本的位置付けに比して、

語としての位置づけが他の語形より低くなってしまうという点にも、問題があると言えよう。

以上のように、「酢」先行語源説には、再検討の余地があることがわかる。では、他にどのような解釈の余地があるだろうか。まず、名詞「酢」の語源そのものを改めて検討してみたい。古代語における漢語（漢字音）の影響を考慮し、漢字「酢」の音に注目して確認してみると、藤堂明保『漢和大辞典』の解釈によれば、「ス」はその呉音であることがわかる（酢の中古音は ts'o, 酸の中古音は suan である。藤堂明保『漢和大辞典』）。現在おそらく和語と思われている名詞「す（酢）」と、この呉音スとが、偶然同音であったとは考え難い。われわれは、文化的影響を考慮するなら、名詞「酢」の語源がむしろ呉音であった可能性を疑わなければならないであろう。つまり、渡来文化として調味的液体がある時期に持込まれ、その液体の名称として外来語である呉音「ス」も渡来し、やがて和語のように「す」として定着したという可能性である。呉音スの存在は、液体「酢」の語源自体が漢語（中国語）である蓋然性の高さを示唆する。

なお、『日本語源大辞典』には、漢語（中国語）との関連に触れる説はないが、一方、外来語説としては、吉田金彦 1996『衣食住語源辞典』東京堂に「朝鮮語 *suil*, 満州語 *zu* などに由来するか。」が見られ、やはり外来語起源の可能性が検討されている。どの外来語音が影響したかはにわかには確定しがたいが、当時、呉音の影響が強かったことを考慮するなら、名詞「酢」の語源は呉音ないし広く外来語と考えておくことができるのではないだろうか。

さて、何らかの形容詞より先に名詞「酢」が存在したという従来の説では、呉音（ないし外来語）スを語源として形容詞スシが誕生したということになってしまうであろう。つまり、語源を名詞「酢」に求める説は、（それ以前にスッパシ・スカシなど、スをもつ他の形容詞をまったく想定していないので）、日本人は呉音「ス」によって液体「酢」を命名し、その後外来語音を語幹として酸味表現「ス・シ」を作りだしたことになろう。しかし、それは、上記のように自然にあった酸味の認識としても、基礎語彙としての古さとしても説得力に乏しいように思われる。

このように、語源や語の派生において、味覚表現として難点が見られるのは、「酢」先行語源説には、名詞「酢」とスシの前後関係に、矛盾ないし無理があることを示唆している。これまで、スカシやスッパシが古い表現であるという視点からの検討がなされていないが、その可能性を一度検討してみる余地がありそうである。では、どのような可能性があるだろうか。

まず、仮に、スカシかスッパシなどの何らかのスシ以外の形容詞が先にあったならば、その語幹の一部から名詞「す」が生じる可能性が指摘できる。名詞「す」がスカ・スハなどの二音節でなく一音節であることを重視するなら、まず、いずれかの形容詞が存在していたところに、漢語「ス」が（例えば大陸起源の調味的液体と共に）受容され、それが和語の形容詞語幹の一部と同音で理解しやすかったゆえに、一音節の「す」として切り離して理解されやすく、いわば和語と漢語との混交形的新語として受容されたのが名詞「す（酢）」であった、と考えられよう。和語「す」が成立した後に、それを元に再度形容詞として、再構成されたのが西日本の「す・し」であると解釈すれば、上記の問題点が解決される。そのような再構成された新しい語形ゆえ、広く拡大するだけの時間がなかったので西日本分布に留まったと解釈でき、それは分布の偏りも矛盾なく説明できることになる。スシが古形でなくむしろ新語形である点は、東日本の東北部などにスシが分布していないことにも現れていると見るべきではないだろうか。（これらの点も、これまでの方言地図の解釈では看過されてきていた点である。）

さらに、この解釈は、周辺部にあつて古形と考えられるスッカイの意味上の特徴からも補強される。

周辺部に残存するスッカイには、ものが腐ってすっぱいという意味が残っている。より古い意味段階と解釈できる自然発酵に起因する酸味の用法が残っている点にも、スッカイないしスッパイの語形の古さが現れていると解釈できる。

以上、「酢」先行語源説の問題点を指摘し、スッカイ、スッパイなどが古形であった可能性を検討した。これらが先行して存在していたなら、西日本方言形スシが生じる可能性は問題なく解釈できることが明らかになった。次に、それらの語源を検討していくことにしたい。

四一（３）スッパイ

四一（３）—１、「スッカイ—ショッパイ混交説」（野元菊雄 1979 ほか説）

以下、スッパイの語源説を順に検討していきたい。

野元菊雄 1979 では、もともとスイとスッカイの２語が分布し、その後、その接触地帯でスッパイが生じたとして次のように解釈する。

「古い分布は、（略）スイとスッカイとが関東西部で接していたものであろう。このため、この地帯で不安定な状態が生じ、意味の近い「塩辛い」を意味するショッパイが触媒となり、その～パイをとって、ここに第三の新しい語形スッパイが生じたと思われる。」（野元 1979）

スッパイの語形からはスッカイがショッパイと混交して生じたとも言えるから「ショッパイ混交説」と呼んでおくことにする（野元 1979 では、スイ・スッカイについては特に触れていない）。

真田信治 1983 では、スッパシについては野元氏の「ショッパイ混交説」を踏襲し、また、スイについては、「酢」形容詞化説を取る。スカイ・スッカイについては「スカイの発生年代や由来は不明だが、やはりスイから派生した語形とみなされる。」とあり、スイの方が古いとするが、スカイの派生過程の説明はない。

これらの説で不明なのは、スッカイ・スカイの解釈である。また、「ショッパイ混交説」（類推とも言えるが）は、確かに、文献的には、ショッパイの後にスッパイの登場が確認できるという点で（『日本国語大辞典第二版』）一つの可能性としては考えられよう。しかし、この～パイが契機となったかどうかの確認は、当時の語源意識に触れるような記録でも現れない限り、確認するのは容易ではないという問題が残る。（それゆえ、スッパイについては、次に挙げる柴田氏の「酢・映し」説を検討しつつ、他の解釈の可能性が皆無かどうかを後で全体的に探っていくことにしたい。また、スッパイの方がむしろ先行した可能性については六章参照。）

四一（３）—２ 「酢・ハユシ」説（柴田武 1990 説）

柴田武 1990 は、学術論文ではないために知られていないが、次のように、スッパイとスカイに関し興味深い語源解釈を示されている。（スイについては「酢」形容詞化説を取り、スッパイについては、やはり三番目の語形とはするが、単純にショッパイに影響されたとは解釈していない点が注目される。）

まず、スッパイの解釈に関わっているので、スッカイにも触れておくが、スッカイは、その「ス（酢）にカユシ（痒し）がついたスカユシ（酢で舌がかゆい感じがする）となり、それからスッカイに変化したとされる（「酢・痒し」複合説とする）。やがて、このスイとスッカイの「接触地域で第三のハユシ（酢映ゆし）が生まれ」たもので、「ハユシは、顔がほてって人に見せられないの意味、カユシよりも刺激をさらに柔らかく表現している。」とされ、ショッパイが「シオ（塩）ハユシに由来する」

のと同じとする（仮に「酢・映ゆし」複合語説としておく）。

柴田氏と同様に、ス・ハユイとする解釈には、他に『日本国語大辞典第二版』がある。

○「『しょっぱい』が「しお - はゆい」の転とみられるように、「すっぱい」も「す - はゆい」かと考えられるが、文献上「すはゆし」「すはゆい」の実例は見あたらない。」[補注]欄
文献に確認できないという問題がそこでは指摘されている。それ以外の「酢・映し説」の問題を検討する。

この語源も、「酢・痒し説」と同様に、①「酢（で舌が）映ゆし」という語構成上の問題（要因を格とする・痒い場所が明示されていない）が指摘できる。②また、『日本国語大辞典第二版』補注でも指摘するように、「スハユシ」の文献例がないという問題がある（ショッパイの直接の語源となっている語形シオハユシ[←シハハユシ]は中世後期には現れている）。さらに、③スハユシの方言例も見られない（シオハイイは西日本方言に実在する）。これら文献・方言ともに確認できない点は、ス・ハユシの実在の可能性の低さを示していよう。さらに、それを補強する点として、④やはり語構成の問題であるが、ハユシの複合語の次のような特徴を指摘できる。この点でもこの語形の実在は疑問と思われる。

ハユシの複合語には、「目^{マユハ}映シ→眩しい」「顔^{カオハユ}映シ→カハユイ→可愛^{カワイ}イ」「面^{オモハユ}映シ」「コソバユシ（コソコソされた場所が痒い）」「舌^{シハハユ}映シ（→シホ・ハユシ→シオハユシ）→ショッパイ」がある。これらの語源は、前項はすべてその感覚を感じる身体部位がそれに関わる語（目・顔（面）・舌、コソコソされる部位を暗示する擬音語）に限られている。味覚名詞（酢・塩）が付く確例はない。（ショッパイの語源も、先に見たように、シハ（舌・唇）+ハユシが古く、シオハユシは、シハ～から後代に語源俗解（塩の解釈）にて音変化したものであって、そのシホ（塩）ハユシという語も中世末の新語でしかない）。このような特徴的な語構成から見て、「酢」とハユシとの複合語の可能性は低いと考えられる。

四一（3）—3 「スハ・ハユシ」説

ハユシが感覚を受ける部位と複合するという点で検討されるのが、小林隆氏からご提案いただいた一案の「スハ（舌）・ハユシ」説である。これは、古語のシハ（舌）・ハユシ（鹹味）をヒントに考えられたもので、「舌・唇」の方言語形のスハ（『日本方言大辞典』L A J）とハユシの複合語として「酸味」を表す語形を想定した一案である（小林隆氏代表科学研究費研究会にて）。

方言を確認しておくとして、L A J「唇」には、スバ・ツバの語形で、山口から九州以南に分布が見られる。ツバは唾液のツバの可能性があり、ハユシを感じる身体部位でなくなるので除外し、スバ（シタスバ）のみを検討すると、スバの方は、特に南九州から沖縄に分布する（「舌」の地図では沖縄のみ）。古代語では有声無声の区別がなかった可能性が高いからスハ（古代語スバ）・スバとも同源として検討される。東日本には確認できない点が問題であるが、九州以南という分布は周囲的でもあり、その古さをうかがわせ、古語としても注目される。この方言スバから見て、身体部位との複合である「スハ・ハユシ」の可能性もあながち否定できないように思われる。

問題点を指摘するならば、一つは、スハハユイ、ないし、縮約したスハユイ・スワイという方言語形も文献例（後代を含めても）、確認できないという問題がある。鹹味の間接語形シオハユシは方言にも残存し、文献例もあるのであるから、酸味の方のこれらの語形スハハユイ・スハユイ・スワイも残

存していそうなものである。

また、「舌+ハユシ」という語構成としては、ショッパイ（シハ（舌・唇）・ハユシ）と語源が同じになってしまうという問題がある。同じ語源から、酸味と鹹味の異なる二つの意味が、ほぼ同じ地域（関東）で発生ないし定着したことになる。同じ語源から、語形変化で意味分化する事例は、皆無ではないからそれ自体は絶対的な問題ではない。ただ、酸味・鹹味のように同類の隣接意味範疇を、同語源語によって区別するというのは、意味的混乱が生じやすいから、弁別効率の点から見ても、起こりにくいと考えられる。それが、異なる地域でそれぞれ別に発生しているのなら、方言にまみ見られるので理解できるが、関東という同じ地域内で併存したことになる点でも、問題を残すように思われる。

また、北関東以北の中舌母音の地域においては、母音イとウの区別が曖昧であるので、仮にスハハユシが生まれたとしても、ショッパイに転じたシハ・ハユシとの間で、ストシとの語形の相違はあまり弁別的ではなかったと考えられる。ショッパイが広く分布している東日本で、発音が曖昧になるような類似語形が別の意味で定着する可能性は低いのではないだろうか。

このように、スハ・ハユシ説は、語形が文献にも方言にも確認できないこと、語構成上、同じ語源となるシハ・ハユシがほぼ同類の意味として同じ地域に実在していること、関東以北での発音の問題、などの意味と語形上の点から考えて（今後方言や文献の探索など検討の余地は残るものの）、課題が少なくないと考える。

このように、スッパイの説を検討してみると、現時点で確定的な論証をもつ説は多くない。現時点で有力な説としては、確証の得にくい推定説ではあるが「スッカイーショッパイ混交説」が、文献と方言的位置から見て、一つの可能性を示しているとは言えようか。スッパイの新しい解釈については、後のスカシ祖語説の中で取り上げることにする。

四一（４） スカシの語源説

四一（４）—１ 「スシからの派生説」（真田 1983 ほか）

上に既に述べてきたように、スシからの語形的派生（「カ」の由来）を説いたものはない。

四一（４）—２ 「酢・痒シ説」（柴田武 1990 説）

次にスカシの語源について柴田武 1990 の「酢・痒シ説」を検討する。まず、「酢・痒シ説」は、「舌（が）痒シ」なら理解しやすいが、「酢（で舌が）痒い」という語構成はいま類例を見つけがたく、意味的なつながりからも首肯し難い。（類似しているショッパイは、語源としては「舌・ハユシ（映・痒）」が元であって、後にシハ部分が塩（シホ）との音の連想が働いて「シオ・ハユシ」に語形変化して後に「ショッパイ」になったものであって、直接に「塩（で）ハユシ」が語源になっているのではなかった。）

また、異なる観点からであるが、「酢・痒シ」が発生する下地があるなら、「塩・痒し」の語形も生まれていそうであるが、それが見られない点も難点である。語形を確認しておく、「酢・痒し」説は、鹹味の方の語形と解釈を、次のような連想で、酸味の語形の解釈にも応用させたものと見られる。

	ハユシ複合語	→ (連想的解釈) →	カユシ複合語説
鹹味	シオ・ハユシ→シヨツパイ	シオ・カユシ→シヨツカイ	(天草の語形はシオ・カライから=安部)
酸味	ス・ハユシ→スツパイ	ス・カユシ→ス(ツ)カイ	(東北北陸)

カユシとの複合語形スカユシが、スカシがある東北北陸全体で容易に生まれるなら、同じ類推で、東北にシヨツカイ(←塩・カユシ)が残存していてもよさそうであるが、東北にはまったく見られない。スカイの範囲が広いにもかかわらず、一方で東北にシヨカイ・シオカユイが生まれることなく、皆無であることは、カユシが意味的にも、やはりそのような語構成を取り得なかったことを示唆しているように思われる。

柴田 1990 は、裏付けの1つとして、天草で「塩からいことをシオカイカという。このカイはカイイ、すなわち塩気をカユイと受け取っている。」として、カユイの事例として挙げている。しかし、この天草の分布を詳細に検討すると、次のように、カユイからではなくカライからの変化形と解釈するのが適当である。

『日本言語地図』(LAJ)の「しおからい」を見ると、天草と薩摩半島(1箇所)に確かにシオカイカが確認できる。しかし、これらの近辺をよく見ると、KARUI, KARII, KARI, KAI(シオなし)などがあり、それらは、「辛い」の地図のこの近辺の語形であるKARUI, KARII, KARI, KAIと同じものである。つまり、ラ行音の存在から見てカユイからではなく「辛い」からの変化である蓋然性が高いことがわかる。実際に、天草の当該のシオカイカの1地点では、「辛い」にもKAIKAがあるから、このシオカイカは、シオカユイからの変化ではなく、シオカライからの変化であると解釈するのが妥当であろう。シオカライはあっても、推定語源シオ・カユイを裏付ける語形は皆無と言える。

このように、シオカユイも、スカユイも確認できないこと、語構成上の問題も残ることは、カユイが、味覚の塩や酢とは複合していないことを示唆すると思われる。

四一(4)ー3 ス・カラシ(可能性として)

提示されていないが、可能性の一つとして、ス(酢)・カラシ(辛)を検討しておく。それは、スカライという語形が福井に1地点のみであるが実在し、かつ、前項「ス・ハユイ」で取り上げたように、カライの語形変化として、鹿児島付近にカイが実在しているので、併せれば、「ス・カライ→スカイ」の成立が理論的にはあり得るからである。

この語形の問題点を指摘しておけば、①やはり名詞「酢」との複合語になってしまうこと(酸味表現が「酢」の後の成立になる)、②カイと短縮するのはそのような語末音節の短縮が顕著な南九州の鹿児島付近でしかLAJでは確認できず、スカイのある東日本では皆無であること、③スカライの文献例が見られないこと、④スカライが1地点のみで多くないこと、⑤東北などの周辺部にスカライの残存が皆無であること、などが指摘できる。

なお検討の余地はあろうが、①のように、酸味表現より先に「酢」の定着を前提とするという点では、「酢・シ」語源説と同じ問題がやはり大きな欠点と言えよう。

四一(4)ー4 スシのかり活用の再形容詞化(可能性として)

スシのかり活用のスカリが、語幹スカとして意識され、再度形容詞化されれば、スカ・シという語

形は生まれ得るかもしれない。これは、語構成からあくまで一可能性として検討してみたものである。カリ活用の残存はスカイの分布する東北ではなく九州での特徴であること、また、スシは前述のように新語形でもとから西日本内に限られていると考えられ（九州にスカイがある場合には可能性があるだろうが）、東北・北陸では、このスカイの語源説は成り立ちがたいであろう。

四一（４）—５ スハ（舌）・カユシ（痒）（可能性として）

もう一つの可能性として、これまでの指摘はないが、舌の方言「スハ」とカユシ（痒）との複合語説を提示し、検討しておくことにする。

この語形は、語形変化としては、supakayushi > suɸakayusi > suwakayusi > suakayusi > sukayusi を考えるものである。supakayusi > supkayusi > sukkayusi のように、促音化も説明可能となる。酢との複合ではない点でも、一つの候補として可能性はあろう。

一方、スハカユイは、諸説の折衷案として考案したものであるので、方言にも文献にも実は例がまったくない。また、基本的味覚であるにも関わらず、複合語形としての成立を考えなければならないと言う点でも、前述のように課題が残る語形である。

以上、このように、スカイについては、従来の説も含め、複合語と見る限り、有力と言えるような解釈はほとんど見つけがたいことがわかる。スカイ自体が歴史的中央に分布がなく東北での分布ということもあって、文献事例がないと思われている点も、どの解釈にも共通した問題点であった。おそらくはそのようなこともあって、スカシの解釈は、スシ祖語説を元にした複合語扱いであった。

以下では、スカイが東北という周辺部分布をなす特徴などから、単純語の祖語形とみる解釈を提示していく。古い確実な文献事例がないという点では、他の説と同様のマイナスを抱えるが、同源と見なせる類義語形の存在（スガシ）を指摘できること、周囲的分布であること、古い単純語形として「酢」とは無関係に位置付けられること、など、その祖語としての蓋然性が高いからである。

四一（４）—６ 新説「スカシ祖語説」

ここでは、有力な語源説のないスカシについて、それがむしろ祖語形であるという可能性を検討してみたい。ここで提示する解釈は、スツパイをスツカイの異音と解釈するものであるので、同時にスツパイの新解釈を提示することにもなる。（以下、スツカイとスツパイは、諸説と同じく促音化語形は強調と解釈し（アハレーアツパレと同様）、共に古形はスカシ、スパシ（スハシ = supasi）と表して検討する。）

単純語としてのスカシには、次のような複数の特徴から、祖語形として検討する余地がある。①東北という周辺の分布をなすこと、②基本味の酸味として「単純語形」が古くからあった可能性が高いこと、③語幹が同源と見なせる関連語形スガシが上代語としてあること（また、関連するスカット（文献は近世）という擬態語もあること）、④スカシの意味に発酵・腐敗と関係する古い意味が残っていること、⑤スカシの解釈に有力な語源説がないこと、などである。

これまで祖語形としての検討がなされてこなかったのは、①文化的中心地の畿内にスシがあること、②スシ祖語説が「酢」で説明可能と思われ、根強い先入観となっていたこと、③東北の方言形であるために地方独自の訛音的なものとして省みられなかったこと、④古い文献例がないこと、などが推定される。そのスカシに新たな解釈が可能となれば、それは隣接するスツパイの解釈とも関わってくる

であろう。

まず、注目されたのは、①スッカシとスッパシとの音声上の類似である。スカシとスパシとにおけるカ行とハ行の対応は、音声的交替形として扱われることは多くないが、日本語史の中では、カムーハム（食）のような、カ行ーハ行の音韻交替として知られる一連の語群に位置付けることができる（後述）。

次に、②その二つの分布（k-p対応）の地理的パターン（分布範囲）が、他のカ行ーハ行の対応をなす語形での分布と、ほぼ共通しているということである（キツーヒツ（櫃）、アクトーアフド（踵）、ハイ（灰）の分布領域が関わる（詳しくは安部清哉 2009.3 参照）。つまり、酸味語彙のみの偶然の分布パターンではなく、音声的対応を背景に持つスカシースパシで一組の分布パターンと解釈できる。

さらに、スカシには、それ自体は古代語での例がない点が問題となるが、③酸味の体感的清涼感という点で意味的に通じると考えられる、清涼・清浄な意味を伴うスガシ（上代）・スガスガシ（上代）の語幹スガヤ、擬態語スカット（近代）するのスカがあり、それらによって、スカシの語感スカと同源の「2音節語幹スカ(*suka, suga)」の存在が推定可能となる。特に上代文献例のスガ(シ)の存在は、意味的に同源の語幹*スカの存在の可能性を示す。以下、これらのことを、具体的に検討してみたい。

以下、議論が諸方面に及ぶので、まず結論から先に示しておきたい。この2語（スカシ・スハシ）は同じ語源、理論的推定形*sukwa-siの異形態で、強調の促音が生じる前のスカシは北方の方言語形で、一方スハシ（supasi）はより南の方言語形であったと解釈できる。その後、先に述べたように、漢語文化が浸透した西日本で異音「ス」が浸透するにつれ、それが日本語の酸味形容詞のスー（スカシ・スパシ）の第一音節とも共通であったため、言わば和語と漢語との混淆語形のようなものとして、名詞「す」が生み出され、その後、この和語「す」に接尾辞「シ」が付いて形容詞「す・シ」として再構成された、そして新しい形容詞形として、外来的要素の影響を受けやすかった西日本の範囲内に分布・定着した、と考えることができる。以下、順に解説していきたい。

まず、右に示したスッパシとスッカシの関係と語源*sukwa-siとは、この二つの語形の類似性と分布パターンから次のように推定できる（以下、安部 2007.10、安部 2009.3 に詳述した部分がある）。この二語が相違するのは、子音のk, pのみであるが、古代日本語においてカ行とハ行（古代の発音ではハ行はP音なのでパ行）との交替形が少なからず確認できる。例えば、

カムーハム（嚙）、ククム・フクムーフフム（含）、ノコギリーノホギリ（鋸）、アクトーアフド（踵）、クナトーフナト（神名）、クスベーフスベ（痣・黒子）、クスブーフスブ（燻）、キタカミーヒタカミ（北上・日高見は同源）

などが既に指摘されてきている。さらに

カカーハハ（母）、カユシーハユシ（映・痒）

があり（安部 2000.12 にて既に指摘）、後者カユシーハユシは、意味が一見異なるように思われるが、「赤く・明るく映えた感じがしてむずむずとした違和感がある」という共通する意味が見て取れるから、遡源は同一語形のk-p交替形と解釈される。（カユイとハユイの意味的共通性は、コソバユシ（こそこそされて痒い）－面映シー目映シ（「目がむず痒い」→眩い）－カホハユシ（→カハユイ→カハハイ→カワイイ可愛）等参照。）

これらのように子音k-pが交替形を生じるのは言語学的には世界的に知られていて、その共通する遡源として、唇音と軟口蓋の二重調音である唇軟口蓋音*kw（wは小文字で上付き）が、理論的に設定されている（例えば、高津春繁 1954, p.60 以降参照）。そのような言語学的解釈を踏まえるなら、

sukasi、supasi の理論的共通遡源形は、*sukwa・si (強調形は *sukkwā・si) となる³⁾。2語は異音という関係になり、東北ではk、関東でpのスッパイで(スシが広がる以前は関東以南全域と推定される)現れたことになる。(kwがバになる事例としては、キリシタン資料『日本大文典』に記録された長崎方言における「菓子」(古い発音はkwasi)がバシになる例が知られており、南でのp化現象傾向も確認できる)。

次に、k-p対応での異音が、地理的に南北で分かれて分布する事例には、同様の例として、k-p交替形をもつヒツ(櫃)に対するk語形であるキツが挙げられる(安部2009.3a参照)。キツの方言語形の分布は、『日本方言大辞典』の報告例を地図化することで分布を確認でき、k語形のスッカイとまったく同じ範囲に分布し、この解釈の妥当性を言語地理学的にも裏付ける。

また、スカシ・キツの2つの事例での分布とは、完全に一致するものではないが、同様に南北でk-pの語形が現れるものとして、アクトーアフド(踵)の分布がある。これは、アクトーアフド・アド(←アウド←アフド)のk-p対応語形をなすと解釈できるものである。その分布においても、p形に由来するアフド・アドが中部以南(中部と九州)に分布しており、「酸っぱい・櫃」での分布境界線以南=p形の分布領域にのみ分布しているという点で2語と共通している(アクト形の一部が中京にも残存する点のみが、酸っぱい・櫃と異なる)。これらの一致は、偶然ではなく、何らかの歴史的地理的な条件によるk-p対応の地理的分布傾向と位置付けられる(安部2007.10、安部2009.3、掲載のアジア・太平洋の「スッパイ」の言語地図参照)。

以上から考えて、西日本など関東以南は、かつてスハシ(*supasi)であったと推定される(スッパシは後代東日本で強調形として促音便化したもので、アハレ(隣)が中世に東国語の影響でアッパレを生み出したのと同じ)。そのスハシと漢語「酢」から一音節名詞が誕生し、形容詞ス・シが出来たというのは、先に記した通りである。

もう一点、意味の上で、このようにスハシ・スカシを古形と見ることの優位性を補足すると、東北のスカシには、特に食べ物が腐ってきて酸っぱくなった時の味や匂いに使われるという特徴が指摘できる。(例えば、「宮城県『葡萄ジャム作ったけど、砂糖少なかったか、すかくなりした』、秋田県『酒が腐敗するとしけあぐなる』」『日本方言大辞典』の例や、執筆者(仙台市出身)の内省による)。これは、古い時代の食物の酸味には、発酵腐敗による酸味形成が多かったため、東北などにその古い意味が温存されたと解釈できる。一方、スイには、このような腐敗・過発酵のニュアンスを常に伴う特徴はないようである。意味の上でも、古語形スカシの方により古い段階の用法を見ることができることになる。以上、長くなったが、スカシ及びスハシが、酸味形容詞の祖語形と解釈できることを示した。また、その理論的推定祖語形として、*sukwa・siを設定した。

スカシ(スハシ)を古形と見るとの従来の一の問題は、これらの2語形に古い文献例がない点であろう。東国の方言語形が古代には既に中央語にはなかったため、後代まで文献に現れないことはまま見られることであるが、それが祖語形の候補となれば話は別で、間接的でも文献事例の裏付けが求められよう。その課題を補う点で可能性があるのが、スカシの語幹スカと、形態的にも意味的にも類似する上代の形容詞スガシ、スガスガシである。

スガシは『古事記』仁徳に「須賀志売(清女)」の例があり「すがすがしい(女)」の意を持つ。スガスガシは「須賀須賀斯」(『古事記』神代、ほか『日本書紀』神代)で、「さわやかで気持がよい。さっぱりとしている。」(日本国語大辞典)の意で使われている。2語に共通して、心身的清涼・清浄感のある語感をもつ。語形としては、suga ないし清濁未分化の段階の*sukaを想定することができる。

酸味も、果物や酢などは、ある種の心身全体での清涼感を伴う味覚と言えるから、このスガシ・スガシと近似する意味領域を持つと見なし得る。味覚のスカシとこれらのスガ〜とが、同源*sukaに遡る蓋然性は決して低くないと思われる。

一方、このような、味覚と心身の感覚とを重ねる解釈を疑問視される向きもあるかもしれない。しかし、例えば、現代語にもある「スカッとする」(近代以降の例)という表現は、心身の感覚のほか同時に飲み物(清涼飲料)の感覚をも共感的に表現し、しかも、語幹がsukaという点でも、当該の形態と一致している。このことも、これらに共通する形態*suka・sugaが、心身や味覚などの清涼感を表現する語幹として古くから共有されていた可能性を示唆する。(さらに同様の例として、清涼感に近接する「味がサッパリしている」や「サバサバする」の子音[s-p-, s-b-]が、一方のスッパイにやはり類似していることも、これらの音の持つ身体・五感感覚の近さを示していると言えるだろう。)

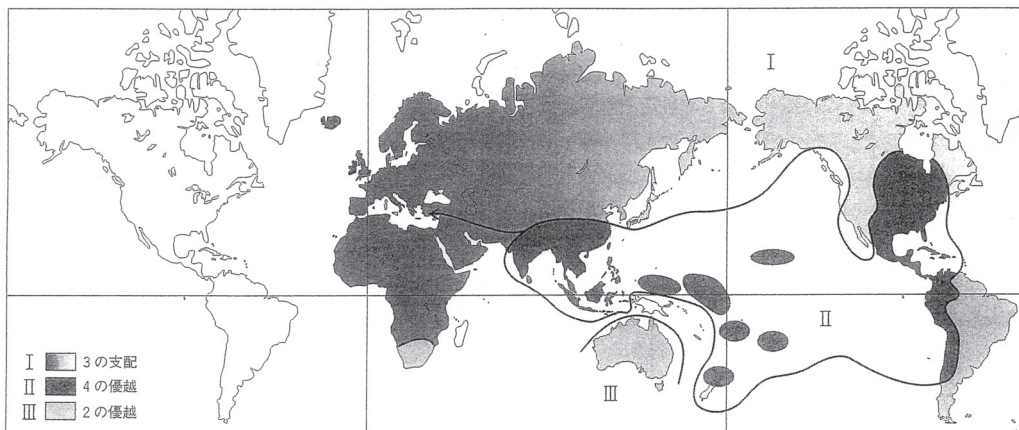
これまで、スシを祖語形と見る解釈は根強く、スカシを語源と見る見方そのものがなかった。そこには、文献例が皆無と考えられてきたことのほか、文化的中心地にある語形スシが古く、一方、関東や東北の語形は、後代の地域的変形・派生形にちがいないという先入観がありはしなかったであろうか。

以上、スカシ・スハシ(*sukwa-)を古形と見る解釈について、方言分布と言語学的理論的再構成、そして、上代の同源語形によって、祖語形として十分に蓋然性が高いことを示した。

五 味覚語彙「四味」——四語による表現の特徴

五一 (1) 基礎形容詞語彙の四語構造

四では、スカシ・スハシを、酸味形容詞語彙の祖語形と見る解釈を提示した。スカシ・スハシは、少なくとも異音と解釈できる蓋然性が高いことが明らかとなった。上記のように、*スカシ・スハシ(supasi)を古形と見ることが可能であるとすると、一方で、他の基礎語彙との類似点が新たに明ら



原数の分布 I=3の支配, II=4の優越, III=2の優越 (Frobenius 1929:327)

図5 原数(基本的数)の分布におけるモンスーン・アジアの「4の優越」(大林太良 1999, Frobenius 1992: p.327)

かになってくる。そして、それら基礎語彙との類似点自体も、上記の酸味の新解釈の妥当性を、間接的に補強することになる。この節では、味覚形容詞語彙と、色彩形容詞語彙、温度感覚形容詞語彙(以下、形容詞を略す)の構造を比較してみることにしたい。(なお、以下での酸味語形は、関東以南の

東日本に広く分布するスハシ（スパシ）の方で代表させる。）

四までに見てきたところから、日本語の味覚形容詞は、古くは、アマシ・カラシ・ニガシ、そして、スハシの四語であったことになる。ところで、味覚語彙と同様に、五感を表す形容詞のうち、視覚、触覚の感覚に関わる、色彩語彙、温度感覚語彙の古代語の語彙をそれぞれ見てみると、それらも古代では四語からなる語彙であった。色彩語彙は、よく知られているように（佐竹昭広、柴田武など）、アカシ・アラシ・シロシ・クロシの四語、温度感覚語彙は、アツシ・サムシ・ヌルシ・スズシの四語（安部 1985）であることが明らかになっている。これら基礎的語彙が、同じように四語体系をなすという点は、興味深い一致である（モンsoon・アジア地域における「4」という概念の優位については、図5と安部 2009.3bを参照）。さらに、それぞれの四語の形態と意味とを検討していくと、そこには、次のような興味深い共通点が認められる。

五一（2） 語幹の二音節

味覚語彙の四語は、その語幹アマ・カラ・ニガ・スハが二音節という共通性を持つ。これは、色彩語彙、温度感覚語彙が、上代において、いずれも語幹二音節の四語語彙という構造をもつことと一致している。

色彩語彙は、シロ・シ、クロ・シ、アカ・シ、アラ・シの構造をもつ。温度感覚語彙も、アツ・シ、サム・シ、ヌル・シ、スズ・シの四語構造であった（安部 1985）。これら視覚・触覚の表現が、語幹二音節という共通性をもつことは、同様の基礎語彙である味覚語彙も二音節であった蓋然性が高い。この点でも、これらの五感の語彙の語構成として、語幹二音節のスハシ・スカシ祖語説を補強している。

五一（3） 母音の構成

これらの二音節四語には、母音の構造と機能においても共通性を指摘できる。3つの基礎語彙を母音の特徴と意味との関係に着目して整理すると、図6のようになる。意味的により強い語、より度合いの強さを表すとみなし得る語彙（図の上部）では、重要度の高い第一音節（頭音法則が働く等）の母音に、開口度が大きく聞こえの大きい（印象の強い）ア母音が現れ、一方、意味的に補助的語彙では対極的な狭いイ・ウの母音が使われているという共通性が例外なく認められる。単なる偶然というよりも、一定の共通性をもつ現象と解釈できる。推定したスハシも他の11語と共にこの特徴を担っており、この整合性を高めている。

図6 「五感形容詞語彙」における四語による「2項十字分類構造」（安部 2011.3 より）

第1母音	意味機能	視覚（色彩語彙）	触覚（温度感覚語彙）	味覚（味覚語彙）
広母音 a	陽（強）	aka - awo 	atu（熱暑） - samu（寒） 	ama（甘） - kara（辛塩）
狭母音 i/u	陰（弱）	siro - kuro	nuru（温） - suzu（涼）	supa（酸） - niga（苦）
語彙体系の特徴 ①語幹2音節 ②第1母音と意味的強弱の関連性：「意味的優性 = a母音」⇔「意味的非優性 = i/u母音」の対立 ③意味的形態的「語彙の階層性」 ④優性語形がより基礎的古語				

[3つの基礎語彙に同じ構造がある。二音節四語の対比的母音構造が基本構造の1パターンと見なし得る]

なお、この母音特徴は、単なる偶然のようにも見えるかもしれない。しかし、補足的に報告しておけば、古代語の客観的意味に偏るとされる《ク活用形容詞のうち、語幹2音節で、かつ、対義語の

表 1 基礎形容詞 形態対応

No.	対義関係	可計測評価 (計・度・性)	陽性・優性	形態	母音	陰性・劣性	形態	母音	備考 (甲乙のあるものは乙を下線と斜体で表記)
1	明暗	光度計	明赤し	aka-	A-a	暗し	kura-	u-a	No. 1～5 が五感感覚の基本語彙
2	温熱	温度計	暑熱し	atu-	A-u	温し	nuru-	u-u	
3	寒涼	温度計	寒し	samu-	A-u	涼し	suzu-	u-u	「涼し」シク活用
4	甘苦	精度計	甘し	ama-	A-a	苦し	niga-	i-a	
5	辛酸	(辛み度)	辛し	kara-	A-a	すはし(酸)*	suka-	u-a	*スイの古形=安部 2007・2010 参照
6	遅速	速度計	早し	haya-	A-a	遅し	oso-	<i>o-o</i>	「とし(疾)」
7	老若	年齢	若し	waka-	A-a	古し	huru-	u-u	「あらたし(新)」3音節
8	硬軟	硬度計	硬し	kata-	A-a	緩し	yuru-	u-u	「やはし」は下部参照
9	厚薄	厚度計	厚し	atu-	A-u	薄し	usu-	u-u	
10	遠近	距離計	遠し	toho-	<i>O-o</i>	近し	tika-	i-a	

a 母音であるが、母音と意味との対応 (優劣関係) が現代語とは反対に見える対義語 (「浅し」「軽し」がア母音)									
11	深浅	深度計	浅し	asa-	A-a	深し	huka-	u-a	感情の浅い・深いは主観的
12	軽重	重量計	軽し	karu-	A-u	重し	omo-	<i>o-o</i>	

母音が同じ a で差が見られない対義語					*客観的 ※主観的 = 母音差なし ≠ 不对応 (形態・品詞・年代等)				
1	柔軟 =*	弾性・柔軟性・硬度	固し	kata-	A-a	柔し	yawa-	A-a	「こわし(硬)」
2	難易 = ※	難易度	難(かた)し	taka-	A-a	易し	yasu-	A-u	「むつかし」は古くは意味的に対応せず。
3	高安 = ※	価格	高し	taka-	A-a	安し	yasu-	A-u	金銭評価としては後代

形態・品詞・時代の上で不对応であるが、母音に差がある対義語。 ≠ 不对応 (形態・品詞・年代等)									
1	粗密 ≠	密度	荒し	ara-	A-a	細まかし(シク)	koma-	o-a	「こまかーなり」。中世「こまし」
2	高低 ≠	高度計	高し	taka-	A-a	ひき(低)ーなり	hiki-	i-i	「ひきし」は中世以降、「ひきーなり」。
3	長短 ≠	距離計	長し	naga-	A-a	短し	mizika-	i-i-a	形態は 2 音節- 3 音節。

4	濃淡≠	濃度	濃し	ko-	o	薄し	usu-	u-u	2音節—3音節。「淡し」「浅し」でも同じ。
5	多寡≠	度数	多し	oho-	o-o	少なし	sukuna-	u-u-a	形態は2音節—3音節。
6	大小≠	体積	(おほき-なり)	ohoki-	o-o-i	ちひさし	tihisa-	i-i-a	品詞不对応。「おほき-なり」>「大きし」は中世以降。

◆母音の傾向が当てはまらない対義語									
1	太細	断面積	太し	huto-	u-o	細し	hoso-	o-o	

母音差がなく、形態・品詞・時代等も不对応の対義語					*客観的 ※主観的 = 母音差なし ≠ 不对応 (形態・品詞・年代等)				
1	広狭=*	面積	広し	hiro-	i-o	せばし	seba-	e-a	母音の差なし。>中世「せまし」。
2	静騒 = ≠	騒音計	静けし	sizuke-	i-u-e	うるさし	uruse-	u-u-a	共に3音節語幹

主観的意味の強いもの					※主観的				
1	善悪※		よし	yo-	o-	あし	asi-	A-	主観的。語幹1音節ベア。「わろしーよろし」は派生語。「いし」(巧優)シク活
2	善悪※		よろし	yoro-	o-o	わろし	waro-	A-o	主観的。「わしーよし」からの派生語。
3	強弱※		強し	tuyo-	u-o	弱し	yowa-	o-a	主観的(強度計は硬さ)。

参考 その他の対義語 (シク活用との対義語)									
1	美醜≠	主観的	うつくし (シク)			みにくし			「うつくし」シク活、「見憎し」複合語
2	難易≠	主観的	難かし (シク)			やさし (シク)			「むつかし」は古くは意味的に異なる。
3	美味不味≠	主観的	いし (>おいし) (シク)			まづし (まづい)			「いし」シク活、「まづし」近世。
4	芳臭≠	主観的	芳はし (シク)			臭し			「かぐはし (香詳)」複合語

対義関係の語を見出しにくいク活用形容詞

- 1音節 うし
- 2音節 うとし、えらし、おぞし、かゆし、くどし、くぼし、しげし、しるし、たけし、つらし、にくし、にぶし、ねたし、はゆし、まるし、まろし、のろし、
- 3音節 あやふし、うるさし、かしこし、こちたし、たふとし、つたなし、ひらたし、めでたし、らうたし、
- 4音節 いとけなし、むくつけし、

関係にある対の形容詞語彙》を検討してみると、この《意味的優的な語形の方の第一音節の母音に、ア母音ないし他方より開口度の大きい方の母音が現れる》という傾向は、上記以外の、他の《基礎的2音節対義関係ク活用形容詞》の傾向としても、新たに指摘できることがわかる（表1参照、安部2007.3bでの初出以後の追跡調査による補筆）。この詳細は、例外事例の解説も含め、別稿にて取上げる予定である（安部2011.3参照）。

五一（4） 意味的形態的対応と「語彙の階層性」

補足すれば、これらのうち図の上部の語彙が、その意味的な優位性から見て、より基本的でより古いものと推定される。色彩を表すものとしては、アカには、意味上、赤と明の両義が含まれ、アヲには青・緑のほか灰まで含まれ、それぞれ白・明・顕、灰・漠の色彩領域をカバーして広い⁴⁾。

温度では、初め温度のプラス・マイナスのみの把握があって、中間的温度の「温暖・冷涼」を分けるのは次の段階であったと推定される。そのことは、形態上、定着度の高い語に現れる重複形が、アツアツ・サムザムという広母音の二語にのみあって下位の二語にヌルル・スズズがないことにも現われている（これは、色彩語彙において重要な基本四語には、周知のようにアカアカ・アヲアヲ・シラジラ・クログロがあるが、他の色彩語彙にはないという階層性との類似性として指摘できるが、温度形容詞でのこの階層性の指摘（下線部）は管見の限りでは本稿が最初である⁵⁾。

これらは、語彙の中に現れる優性・上位と劣性・下位のレベルの差を示すもので、「語彙体系の階層性」とでも呼べる現象である。

このような「語彙の階層性」は、味覚四語の意味的關係にも認められそうである。まず、甘－辛鹹では、食物として共にプラスの要素と位置付けられる。年齢を問わず甘味は肯定的に受容され、甘いものはエネルギーとしても重要性が高い。辛鹹の、塩分やミネラルは生物に欠かせない最重要要素である。また辛味は、塩味が重要であるのと類似して、主食に辛味があってもむしろ食欲をそそる美味として受容される（例えば、カレーや韓国料理。酸味や苦味が強い主食は皆無でないがむしろ少ない）。そのように、甘－辛鹹は、むしろ必要なエネルギー要素、主食において肯定的積極的に関わる味覚として位置していることがわかる。それに対して、酸－苦はやや脇役的味覚であろう。味覚語彙でもア母音のアマ－カラの方がより重要性が高いことがわかる（これらには「甘辛あじ」という複合表現もある）。

なお、史的にも、辛鹹味の方が酸味の上位的広義的概念であったろうことは、次の文献例と方言分布の2点からも推定される。「酢」の別名（別訓、「鄙語」）として中古の古辞書に「カラサケ」があり（「鄙語謂酢為加良佐介」『和名抄』）、酸味が「カラ（辛鹹味）」の方の概念で把握されており、これは、「辛鹹味（上位概念）>酸味（下位概念）」という新古関係ないし上位下位関係を示唆している。方言分布でも「酸っぱい」の地図の周辺部に「カライ」の語形が分布していて、より古い段階には酸味は辛鹹味に包摂されていて「カライ」でも表現されていたと解釈できる点で、文献例と一致することがわかる。

（補足すれば、表の縦の甘－酸の対応は、「果実」（の一部）の《熟未熟》の味覚の中に対応が認められる。辛－苦は香辛料を含む「野菜・山菜類」の味覚の中に認められる。）

これらからは、身近な食料の、より重要性の高いものの味が、味覚感覚とその表現の発達に関わってきているということを投影していると言えよう。

六 「ショッパイ先行説」への反論（スッパイとの前後関係）

味覚形容詞語彙の検討を踏まえて、基礎語彙の類型的構造についても検討してみた。酸味の祖語形と見たスカシ・スハシは、方言解釈の一つの可能性に過ぎないように見えたかもしれないが、基礎語彙としての類型的特徴に適合している語形であった。その点でも、五章で見たように、スカシ・スハシは、従来説のように、複合語と見なす必要がないと解釈されることになる。

ところで、スカシはともかく、スッパイについては、やはりスイとスカイの中間地域でのショッパイとの混交語形では、と見る向きも、なお根強くあるかもしれない。ここで提示したキツやアフドなど k-p 対応の方言分布の解釈よりは、「混交説」の方が「馴染み」があろう。そのような従来説への支持に対しては、まだなお看過されている視点を、基礎語彙構造を提示した後に、さらにここで提示しておきたい。それは、従来説のショッパイ先行説とは反対に、スッパイがむしろ先で、ショッパイはスッパイの類推のためにシオハユイから促音化した可能性の方が高いという解釈である。（これまで、そのような逆の発想がなかったのは、スッパイに対する別解釈がなかった、ということに根本の理由があろう。）

そのような解釈のヒントは、これまで述べてきた次のような点から見つけ出すことができる。

- ① 辛味を含まない鹹味のみ独自の表現（ショッパイ）の方が、酸味（スッカイ・スッパイ）より後代（中世以降）の語形であること
- ② スカシ・スッパイの分布境界は（本文で触れた）他の k-p 対応と同じ位置を保持していて、背景に古代からの音声の問題があることが明らかであること
- ③ 一方のショッパイは東日本全域に及び、こちらの方が東日本での近世以降の新語として、一語単独での統一的拡大を示唆すること

以下、簡単に解説しておきたい。

まず、従来説の問題として、スッパイの方がショッパイにひかれたとするならば、スッパイは上記のような一定位置で留まらず、そのショッパイのある限り、より東北北部まで拡大してもよかったであろう。が、実際はスッパイは音声対応上の意味がある一定範囲を特徴付けていた。影響の受け方が反対なのではないか。

逆転させた発想（スッパイが先でその影響をショッパイが受けた）における解釈は次のようなものである。アハレがアッパレになっていたのと同様に、スハシから既に方言スッパシになっていた関東に、室町末以降の新語シオハユシ（ショッパイの直前の語源）が伝播し、東にも「五味」目にあたる鹹味の口語語形を新たに伝えたと、既にあった「スッパイ」の類推によって（さらに所謂子音性的優位の方言語彙の特徴[例、オホケナイ>オッカナイ、お茶引き→オチャッピーほか]も加担して）、ショッパイが誕生し、こちらは五味目の新しい概念であり、かつ、音声的対立上の制約もないので、江戸で受容されると一気に東日本全域に拡大し定着することになった、と解釈できる（スッパイとショッパイの文献初出例は、現時点ではいずれも 1800 年ごく初めで近接している）。

この「スッパイ + シオハユイ新混交語形説」は、スッパイの分布の限定理由、および、ショッパイの分布との大きな相違とを説明できるが、一方、従来説ではそれらの説明は不十分であろう。

ここに、スッパイも、ショッパイからの影響で生まれたという従来説だけが唯一の解釈ではなく、その反対であった蓋然性が高いことを示した。これまで、この反対の発想がなかったのは、スッカイ・スッパイ自体に別解釈が提示できなかったことも関わっているであろう。さて、さらに、スカシ祖

語説を補強するために、中国語、オーストロネシア語、朝鮮語を次に見ておくことにしたい。

七 アジア・太平洋における酸味語 [*sək] の分布

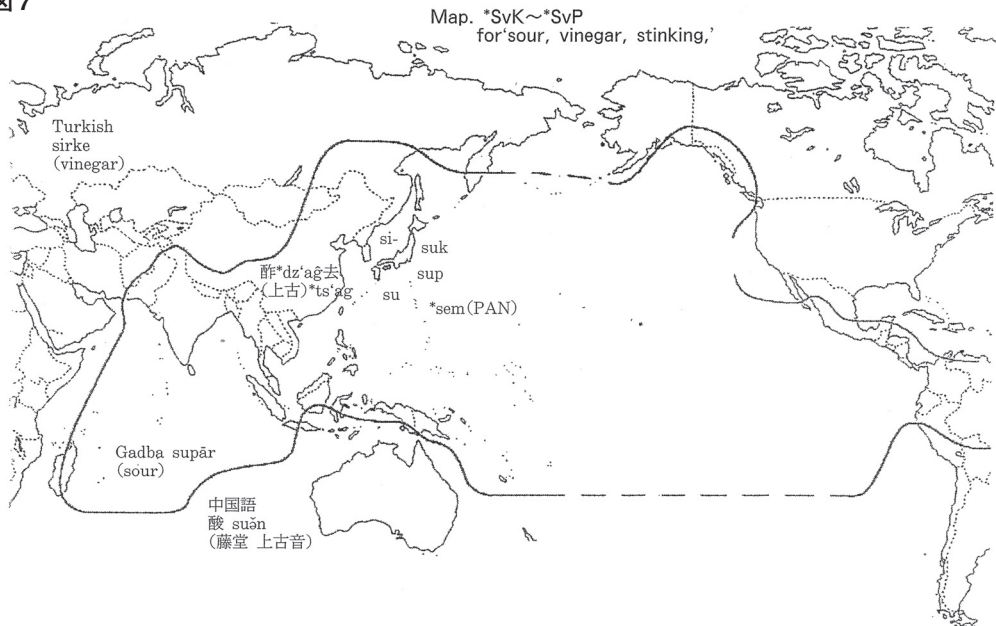
最後にもう一点、アジアの史的言語学というまったく異なる視点から、スカシ祖語説の持つ一側面を補足しておく。それらも、スカシが日本語祖語形である蓋然性の高さを裏付ける。

まず、中国語の名詞・形容詞「酢」の上古音は、[*dz'äg 去]『上古音韻表稿』、[*ts'ag]『藤堂明保漢和大辞典』と推定されている。この語形は、先に挙げた日本語祖語形 *suka- (*sukwa-) と類似する。日本語のサ行は ts- とも推定されており、清濁未分化を考慮すると、祖語形スカは実際には [*tsuka, *tsuga, *dzuka, *dzuga] などの範囲も想定可能となるから、スカは、子音においては中国語上古音と酷似しているのがわかる。

ところで、拙論（安部 2008.3 など）による限り、東アジア言語（モンスーン・アジア言語）の基礎語彙には、いくつかの共通した祖語形の可能性が指摘できる（河川名、火（ホ）*apui、糸（カナ）*kan、麻（ソ）*tso など。ABE2006、安部 2007.10、安部 2008.3、ほか安部 HP 参照）。それらのことを踏まえれば、母音は保留するとして、中国語と日本語における共通祖語形として、[*s-k][*ts-k]（あるいは、[*s-g][*ts-g]）を設定できることがわかる。中国語との酷似は、この語形も、モンスーン・アジア（MA）の基層語（ABE2006）である可能性を示唆する。

改めてその視点から再度検討すると、[g·k] は、MA の南では、[g·k - b·p] の対応として、p あるいは b で現れる傾向が指摘できるから（安部 2007.10、安部 2008.3）、オーストロネシア語祖語 PAN において [*ts-p][*ts-b]（あるいは、[*s-p][*s-b]、ないし、p·b の変化形としての [*s-m]）として現れることが、理論的には推定できる。そこで CAD1994 によって sour（酸味）の PAN（Proto-AN）を確認すると、果たして予想された [*sem] が確認できる（PAN としては [*qal+sem]）とあり、ヘスベ

図 7



ロネシア祖語形 PHN としては [ʎa+sem] とある。複合語の前部要素を別として、これらに共通する *sem が確認できる)。音節末での b - m の交替は生じやすいから、この PAN の語形 [*sem] は、上記日本語と中国語の共通語源と同源として説明可能であることがわかる。よって、これら三言語と MA 言語研究からは、モンsoon・アジア祖語形 (PMA) として、[*sək] (北方語形、南方語形としては [*səp]、母音は推定) が、理論的には設定可能となる。

そして、これらの語形が一致するという事は、日本語でのスカシ祖語説を支持することにもなる。(図7にも示したように、MA の他の言語にも共通語形が見出せる。現代朝鮮語の sida, sikum-hada (酸っぱい) の語幹にも類似音を確認でき、現在その古語形も調査中である。)

ここでは、モンsoon・アジア言語研究から、スカシ祖語説を支持し、併せて新たな遡源形として [*sək] を提示してみた。(注の後の<補論>参照)

八 おわりに

さて、長文になったが、味覚形容詞語彙を取上げ、それらの語源を含む歴史と方言分布、また、その語彙構造について検討してきた。先行論文は少なくなかったが、そこでは、中国語「酢」「酸」の漢字音は一度も検討されていなかった。本稿では、スイ、スッパイ、スッカイ、ショッパイなどの解釈について、まったく新しい解釈を提示できた。

議論が多岐にわたったが、古代にまで遡る日本語の語彙の研究、語源研究、方言分布形成史の研究は、現在の水準としては、このように多角的視野から、近隣言語との比較言語学的類型論的検討も加味した考察なしには、意味をなさない段階に入っていること、改めて示したつもりである (その点は、安部 (2008.3) 「アジアの中の日本語方言」も参照)。

付け加えておけば、現在、生理学的には「甘味、酸味、塩味、苦味、うま味」の5つが、化学受容体を介して膜電位の活性化を引き起こしている「五基本味」と位置づけられているものである (「辛さ」は痛覚に属するとされる)。西洋では、このうちの4基本味説が長らく支持され続けてきたが、近年になって「うま味」がようやく五味目として国際的に認知された (英語でも *umami* と表記される。日本で 1908 年に池田菊苗により発見されていた「うま味物質」グルタミン酸による味覚)。長く認められにくかったうま味を別にすれば、取りあげてきた古代日本語の基本味覚語彙四語は、この従来の生理学的「四基本味」とも一致しているものである。

なお、五章の最後に触れた「語彙の階層性」については、紙幅の関係で、今回は詳しくは取り上げられなかったが、語彙は、基礎・基盤となる既存の構造に、新たな語 (語彙) をあたかも「層」を増築して重ねるように積み上げ、あるいは、合体させてより複雑な構造を構築していく傾向が見られる (安部 2010.3 参照)。温度形容語彙は、中古になると四語に加えて、アタタカ・ヒヤヤカという形容動詞形によって中間の意味の層をそれぞれ加えてより複雑化した。色彩形容詞も、四語について、黄色・茶色、緑ほかの語彙を増やし、細分化していくが、それらの中にも、意味 (の重要度、優位性) と形態 (語構成) の上で、段階的階層性が示されている (別稿で触れたい)。

もはや紙幅が尽きたが、語構成、語彙の構造、語彙の階層性、方言語彙などの研究手法を総合させて、語彙の歴史を再検討するという1つの手法を、実践してみたものでもあった。

注

- 1) この議論は、より厳密に言えば、酸味の「認知」と、語としての必要度・存在意義との問題としては、もう一段階の検討が必要である。例えば、本論部分での議論は、「酸味」の自覚が液体より優先していたことまでは論じているとしても、その表現（形容詞）の必要性がいかであったか、ということまでは含めていないことが、厳密には指摘可能である。例えば、酸味を自覚してはいたが、表現としての必要度が低かったので（酸味の強い果物は好まれず、発酵した食物も不適であったのであってその表現は生まれなかったか、あるいは、他のカラシなど代用されていた、など）、表現されず、むしろ、酒の過発酵過程や熟れ鯖的食品生成過程などから保存食に関わる「酢」が、特別に有用な液体と意識され、その液体とその利用法の「有効性・意義」が自覚されることによって、その味覚もはじめて、特別に表現することが社会的に求められて、形容詞「スシ」が生まれ出された——だから、物としての「酢」の誕生が先行するということは、絶対あり得ないとは言えない——という考え方も、あり得るであろう。つまり、「味覚」の「認知」という問題と、語の誕生という社会的要求とは別のステップがあることも、当然ながら考えられることになる。ここでは、やや議論が煩瑣になることもあって、この注にて述べたが、このような解釈にたった場合でも、「酢」先行語源説を積極的に肯定しにくい理由は、本文にも触れるように、「酢」と同じ程度に古いことが推定される形容詞スシが東日本に周圈的な分布すら残していないこと、また、酢の語源として呉音「ス」の影響が考えられること、スカとスハとの同語源が本文のように説明可能であり古語残存の多い東日本に分布すること、スガシ（スガスガシ、スカット）などの酸味と関わる語幹スガが上代に既に存在していること、など、他の解釈の可能性の方がより検討されたことによる。
- 2) 舌の「味雷」が味覚受容体で感じる「基本味」の5つは、甘味、うま味、塩味、酸味、苦味という。辛味は、それらとは異なり「三叉神経」によって伝達される痛覚や温覚と同じ感覚になる。例えば、「美味しさと味覚の科学の最前線」『ニュートン』（2007.1）1月号などに、わかりやすい解説がある。
- 3) ここで祖語形として *kw（ここの w は上付き小文字）を設定した。一方、日本語には本来合拗音 [kw] は存在せず、漢字音としてのみ後に入ったというのが通説である。ここでは k - p 交替形におけるあくまで言語学上の理論的語形であり、日本国内での現実音としては suka- と supa- であったと解釈しておく。（ただし、今後の研究のために次の点のみ付言する。方言分布における合拗音の残存状況は、言語地理学の研究水準に照らして、漢語が中世以降に庶民にも徐々に普及していったとされていることを考慮しても、この時期以降の漢字音（しかも特殊で、江戸では発音されなかったような音）が、果たしてこれほど全国の周辺地方隔々に、普及していくことが果たして可能であっただろうか、と思われるほど特殊な周辺残存分布を示している。そのことは注意しておく必要がある。その分布パターンには、これまで注目されていない特徴的パターンが認められ、焼畑農業の多い地域の分布状況と、「平家落人伝承の残る村落の分布」に酷似している。いまはこれらを指摘するに留める。）
- 4) 詳細はいま紙幅の関係で略すが、アヲに黒が含意されないのは、黒が、原初的には闇と同じであったために、空間（場）としては知覚されても、物体（事物）に対する色としては知覚が遅れたゆえであろう。事物の色彩としてのシロ・クロの語は、それらが空間としての明暗から切り離され、事物の色として独立に把握されてからのものと考えられる。イロという名詞とこれらの～ロという形態（接尾辞と解釈される）が共通するところは、イロとシロ・クロの誕生段階の近さ（他のイロ⇔シロ・クロ）を示唆している。
- 5) 重複形は味覚表現としては見られないようである。ただし、その派生的用法である感情表現としての意味では、劣位・下位の方に「スガスガイ」と「ニガガイ」がそろって存在し、一方、優位・上位語彙には「アママ」「カラカラ」ともに確認できない。同位同士では有る無しが共通するという点は、「アツアツ」「サムザム」と共通することになるので、興味深い点であるものの、優位の方に重複形があるという色彩・温度の形容詞とは重複語形の有無の位置付けが異なることになる。ここでは、仮に、感情表現である派生用法であるため、本来の特徴とは異なる傾向が現れた、と解釈しておくことにしたい。

《補論》「す」の語源が「酸」、「すっぱい・すっかい」の語源が「酢」である可能性をめぐって——

「ス」「スッパイ」の語源そのものとしては本文のように解釈されるが、図6と関わって、今後のアジア言語における「酸味」語の言語地理学的研究のため、および、より厳密な行論のために補足しておく。それは、①中国語における「酢」と「酸」との地域的相違の有無の問題（「酢」が古い広域の語、「酸」は比較的新しく限定的など）、②「酢」がスカシ・スハシの語源で、一方「酸」の音がス・スシの語源となっている可能性（日本語「す」の語源はより厳密には「酢」か「酸」か?）、③それ

ぞれが日本語に影響した時期的相違の問題、に関してである。順に簡略に述べる。①「酢」の上古音は本文に記した通りで (*dz'äg 去) [*ts'ag]、日本語スカ・スハや AN だけでなく、図 6 のチュルク語の sirke (vinegar) など、アジア・太平洋の他の言語と関わっていると見られる。一方、「酸」の上古音を見ると [swân 去) 『上古音韻表稿』、[suǎn) 『藤堂明保 漢和大辞典』であるから、こちらは尾音 n が脱落するとスとして受容される可能性がある。この「酸」も「酢」と同義であるから、「スシ」「ス(酢)」は、後者の「酸」の中国語音から呉音スとして受容され、次いで和語「す」として定着した、という可能性も考えられることになる(その場合、スが呉音であるなら、[suǎn 平) (酸)の音声は、アジアに広く同源語形がある「酢」の音声よりも比較的新しい中国南方音ということも考えられることになる)。つまり、②日本語のス(シ)は、実は後から「酸」の音形として受容された可能性も考えられることになる。(本文内では話を単純にするために「酢」の方の呉音ということのみで述べたが「酸」の方の字音語が語源である可能性もある、ということになる)。仮に、そのようであった場合は、③日本語のスハ・スカの音が、中国語の「酢」とも同源のアジアの古い音形である一方、西日本に偏るスシは、他の西日本に偏る方言語形が弥生時代や古墳時代以降の語形が多いことと同様に、スカ・スハとは異なる比較的新しい段階になって受容された中国語音による語形である可能性もあることになる。

なお、スを呉音と看破したのは藤堂明保である。かつ、その解釈は管見の限り藤堂氏のみである。その呉音か否(和語)かという判断は、その解釈が正しいか否かという問題のほか、音すまた和語「す」というものの語源を、アジア・太平洋の中でどのように解釈できるのか、というこのテーマの根本的問題をわれわれに突きつけている。本補論での考察からは、実は、「酢」の訓(=和語音)がスカ(シ)、「酸」の方の音(呉音)がスであったと見るべきなのかもしれない、ということが、新たに視野に入ってくるのである。

訓としての「す」は既に古辞書において、「酢」(和名抄)、「酸」(名義抄)、「醋」(和名抄・名義抄)に当てられている。しかし、それらの段階は既に字音起源語スが完全に日本語として定着した後であって、意味的に該当するこれらの漢字に当てられたものにすぎない。現代語には「酸」に「す」の訓は当てなくなったが、これら古辞書にあるスも、その語源は呉音であったと見なすことも、「酢」と同様に可能なのである。

ここにこのように解説すれば、藤堂氏の洞察はまさに刮目に値することが、より深く理解していただけであろうと思われるので、あえて補筆したしだいである(因みに、同義の漢字「醋」の上古音も [*ts'äg] 『上古音韻表稿』、[*ts'ag] 『藤堂明保漢和大辞典』で、「酢」に酷似し、あてた漢字は異なっても酸味の語としてこれらの音形(発音)が優勢であったことがうかがえる。藤堂氏はこの「醋」においても「ス」を呉音としている。)

【参考文献】(ほか関連するものは HP 参照; <http://www.geocities.jp/abeseiya2005/>)

ABE, Seiya, 2006, On the "Monsoon Asia Substratum" and Altaic Superstratum in East Asia: A Stratificational Approach to Geolinguistics, pp.79-96, Guido Oebel edit., Japanische Beiträge zu Kultur und Sprache: Studia Iaponica Wolfgango Viereck emerito oblate, (The Festschrift for Doc. Wolfgang Viereck), pp.372, LINCOM GmbH, Muenchen, Deutschland.

安部清哉 (1985.1) 「温度形容詞語彙の歴史——意味構造から見た語彙史の試み——」 『文藝研究』 108, pp.39 ~ 51. 東北大学文学研究会。

安部清哉 (2000.12) 「比較語彙研究の諸相と広がり」 『比較語彙研究の試み 6 ——国際シンポジウム比較語彙研究 II ——』 名古屋大学大学院国際開発研究科 (味覚語彙と基礎語彙に言及している)

- 安部清哉 (2007.2) 「変わる日本語——アマイ・カライ・ス(ッ)パイ・ニガイの「四味」の世界」『ヴェスタ』65、(法)味の素食の文化センター、pp.28 - 31。
- 安部清哉 (2007.3b) 「味覚形容詞語彙の歴史と日本語基礎形容詞語彙の類型的構造——スシ・スカシの語源の再検討から——」『日本語史の理論的・実証的基盤の再構築』(平成16 - 18年度科研費研究成果報告書:代表・金水敏編)、pp.15-28、私家版、pp.143。
- 安部清哉 (2007.10) 「中国語・日本語・朝鮮語の東アジア言語におけるある種の「音韻対応」(k・x - p)」王鉄橋・姚灯鎮主編『国際化視野中的日本学研究——紀念胡振平教授從教授45周年(東亜日本学国際検討会論文集)』(洛陽・東アジア日本学国際シンポジウム論文集)、天津・南開大学出版社、pp.31-39、pp.638。
- 安部清哉 (2008.3) 「アジアの中の日本語方言」『方言の形成(シリーズ方言学1)』pp.123-167、岩波書店
- 安部清哉 (2009.3a) 「『きつ(にはめなで)』(『伊勢物語』十四段)の日本語方言及びアジア言語の中の位置」『国文学言語と文芸』125、pp.37 - 58、おうふう社
- 安部清哉 (2009.3b) 「指示代名詞のアジアにおける地理言語学的研究課題」学習院大学東洋文化研究所『東洋文化研究』11
- 安部清哉 (2010.3) 「語彙の特性から見る語彙史研究の諸相——「語彙のカテゴリー」「部分語彙」「反現象」「反作用」「中和」——」『人文』8、学習院大学人文科学研究所、pp.210 - 246。
- 安部清哉 (2011.3) 「形態と意味との相関関係をめぐる語彙論的諸相」『学習院大学文学部研究年報』57
- 石毛直道 1983 「味覚表現後の分析」『言語生活』382
- 国語研究所編『日本語地図』LAJ「解説」——「すっぱい」「スイ・スッパイ・スッカイの歴史的な関係、分布によって推定すれば、次のようになる。古くはスッパイはまだ存在せず、二大勢力であるスイと、スッカイとが関東西部で接していた。このため、この地帯で不安定な状態が生じ、隣接する意味分野をあらわすショッパイが触媒となってスッパイという新しい語形が生じ、それが中心地のことばとして周囲に発展したのではないか。」(傍線引用者)
- 佐藤亮一監修 (2002.7) 「酸っぱい」(担当は真田信治氏か)『方言の地図帳』小学館
- 真田信治 (1983. 4) 「すい(酸い)・す・すし・すっぱい」『講座日本語の語彙10 語誌II』明治書院
- 柴田武 (1990. 2) 「食の言葉」『ヴェスタ』2号、味の素食の文化センター
- 高津春繁 (1954.7) 『印欧語比較文法』岩波全書
- 都甲 潔 2002 『味覚を科学する』角川選書
- 長尾 勇 1982 「五味考——味覚用語の変遷と分布——」『語文(日本大学)』55
- 長尾 勇 1983 「味覚用語の変遷と分布」『言語生活』382
- 長尾 勇 1986 「しははゆし考」『語文(日本大学)』66
- 『ニュートン』2007、1月号「美味しさと味覚の科学の最前線」
- 野元菊雄 (1979.3) 「酸っぱい——第三語形の採用——」『日本の言語地図』中公新書(スッパイについては、LAJ解説での解釈を踏襲している。)
- 真柳 誠 (1984) 「薬性論の検討第2報-内経系医学における五味論の発展と変遷-」(日本東洋医学会第35回学術総会 1984年5月12日、『日本東洋医学雑誌』34巻4号85-86頁、※韓国『医林』誌161号69-70頁に翻訳転載)
- 吉田金彦 (1996) 『衣食住語源辞典』東京堂
- (なお、藤沢 真 1975 「味の表現の地域差——『日本語地図』から——」『言語生活』286は、LAJの解説(上記引用部分)とほとんど同じ記述が注記なしにそのまま記載されている。)

旧稿(安部清哉(2007.3b))での【付記】

(1) 本稿の味覚語彙は、はじめ安部清哉(2000.12)で部分的に取り上げ、①古代語での「四語」体系、②色彩形容詞語彙・温度形容詞語彙の四語体系の類型、について結論のみ簡略に言及している。本稿では、語源の諸説の検討、方言分布の新解釈、および、従来の文献国語史におけるいわゆる「五味」の研究史も追記し、その後見出した柴田1990を含めて(下記(2)の安部2007.2において紙幅の都合上略したことも含め)、全体的に詳述したものである。

(2) 本稿の内容は、成稿過程で結論の一部を次の一般向けの企業広報誌に公表している。安部清哉(2007.2)「変わる日本語——アマイ・カライ・ス(ッ)パイ・ニガイの「四味」の世界」『ヴェスタ』65、(法)味の素食の文化センター、pp.28 - 31。

【2010年9月 付記】

①本稿は、当初、安部清哉（2007.3b）として、科学研究費助成金研究成果報告書にて報告されたもので、今回公表するにあたり、説明語句をよりわかりやすいように一部補筆し、また、その後の拙論やそれに関わる情報を追記したものである。旧原稿 2007.3 b に対してワード文字数で約 35% 加筆したものである。なお、科研費報告書での原稿は、内部報告書であって広く公刊されるものではないので重複発表に該当しない、という学術界の通例にならない、ここに加筆版として公表するものであることを申し添える。

②本稿の内容は、安部清哉（2007.3b）以後、次の研究会にて以下の題名でその一部を口頭発表している。席上、ご教授下さった参加者に感謝申し添える。安部清哉「スッパイ・スッカイ・スイ（酸）の語構成（語源）と言語分布と味覚語彙構造」、第 147 回「青葉ことばの会」2007 年 5 月 19 日（土曜）、於・学習院大学。

ENGLISH SUMMARY

On the Lexical Structure and Etymology of Several Basic Japanese Adjectives Used to Express Sense of Taste and Other Senses-Amai, Karai, Suppai, Nigai, and Others.

Seiya ABE

This paper will examine features related to the geographical distribution of Japanese adjectives used to express sense of taste, including Amai, Karai, Suppai, Nigai, and others, that are problematic in a historical linguistics context pertaining to the roots of Japanese language. In particular, it has been proven that the etymology of “*sukwa-shi (<suppa-i, <sukka-i)” in the East-Japanese dialect, Chinese “酢”, and “*sem” of Proto-Austronesian (PAN) language have the identical root and origin, and that the etymology of “su-shi (<su-i)” in the West-Japanese dialect is Chinese “酸”. It has also been demonstrated that the roots of these adjectives have the same origin in Asian Language.

In addition, by examining the etymology of these adjectives, this paper will describe that a cross structure composed of four words is the prototype lexical structure of Japanese basic adjectives.

Keywords: geographical distribution, Japanese adjectives, sense of taste, Amai, Karai, Suppai, Nigai, etymology, “* Sukwa-shi (<suppa-i, <sukka-i)” as for sour, “Su-shi (<su-i)” as for sour, “酢”, “酸”, prototype structure, basic adjectives.